

Project

1

災害後の森林環境と人間をつなぐ芸術文化的実践 —文化継承の森づくり—

近年、気候変動による豪雨や山火事等の自然災害による環境破壊が頻発している。九州北部の英彦山分水嶺^{ひこさん}の領域では、復興半ばで頻発する豪雨災害が森林環境への不信感を生み離村率を高めている。復興活動のうち、被災地の自然環境と人間の関係性再生についての動きは少ない。そこで本研究は能動的に森林環境との心理的关系性を繋ぎ直すファクターとして芸術文化に着目する。本稿は1. 復興における森林と芸術文化の関係についての聞き取り調査。2. 森林の遺伝的系統と修験道文化に基づく価値創造。3. 三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり。4. サンゴの生命の樹プロジェクトの進捗について報告するものである。

1. 復興と芸術文化の関係についての 聞き取り調査

災害や公共事業等を契機に、自然の循環や伝統文化の継続に向き合うことになった地域を対象にフィールドワークを行った。

(1) チコロナイ活動とアイヌ文化(北海道平取町二風谷):

貝澤耕一、貝澤太一

北海道沙流郡平取町二風谷は、アイヌ民族の占める割合が住民の約7割となる地域である。アイヌ民族2名による審査請求(1989年)に始まった「二風谷ダム」への抗議は、アイヌ文化と治水、自然環境についての議論の契機となった(1997年に裁判は敗訴したが、判決文においてダムの違憲性とアイヌの先住性が認められる)。裁判原告の故・貝澤正は、治水力を高めアイヌ文化を育み、「森林本来のあり方」を取り戻すための森づくりを始める。息子の貝澤耕一(図1)は「ナショナルトラスト・チコロナイ」として本活動を引き継ぎ(1994年、2001年からNPO法人)、2020年からは孫の貝澤太一が受け継いでいる。耕一は、多様な関わりを生み出し続ける仕組みや場づくりに注力し、自然や人の主体性を重んじている。「面白いから関わる」という参加者の自発性を引き出し、特に子どもたちが自由に森で遊ぶことを重視している。貝澤太一は「アイヌの根本的な考え方は“森の声を聴く”。結局はこの森を見ながらやっていくしかない」と語った。両氏はアイヌ文化にあてはめて作作的に森をつくるのではなく、「森が戻りたい本来の姿になるための手助けをする」という意識で行動している。自然の森から生み出される生活や創造こそがアイヌ文化ではないか、という考え方である。

(2) 中越地震と角突き(新潟県長岡市山古志): 山古志闘牛会

2004年10月23日、新潟県中越地方を震源とする震度7の中越地震が発生した。復興のシンボルとなったものに牛の「角突き」(図2、国重要無形民俗文化財)がある。震災から20年の記念行事に際し、山古志闘牛会副会長の関正史、会長の松井富栄(故・治二会長の息子)に聞き取りを行った。旧山古志村(現長岡市山古志)は震災後に全村避難となり、飼育していた闘牛や錦鯉を置いていかなければならなかった。松井親子と関は、震災から1週間後

に体力のある闘牛たちを危険な山道を曳いて救出した。震災から半年も経たない避難生活の中、松井治二は「いつも通り(初場所を)やらなかったら駄目だ」と言い、仮設の闘牛場づくりに取りくんだ。災害後まもない角突きは、傷ついた住民の感情を鼓舞し、「関係性の中で生かされている」(中動態)という気づきをもたらしたという。「うちらが守ったというよりも、この牛たちに守られているんだよねと。伝統文化、祭りはやっぱり窮地に陥った時、必ずその人の力になるもんだというふうに思ったね」と関は語る。山古志では、「生きるもの(角突き牛)」を核とした感動の共有が、災害後の地域内外のコミュニティを再生・継承する動機となっていた。



図1 「チコロナイの森と貝澤耕一」2024年



図2 「中越地震20年追悼の角突き」2024年



図3 「村上タカシと被災物」
2024年



図4 「被災樹木と旧・門脇
小学校」2024年

(3) 東日本大震災(宮城県石巻市、福島県いわき市):

村上タカシ、安藤邦廣

2011年3月11日、東日本大震災が発生し宮城県北部で最大震度7、最大潮位9.3m以上の津波が記録された。宮城教育大学教授の村上タカシ(図3)は、震災から1ヶ月経ったころ、災害記憶を伝承するアートプロジェクト「3.11 メモリアルプロジェクト」を始めた。この活動(MMIX Lab)には「残す(被災物の保存)」「示す(桜プロジェクト)」「伝える(メモリアルキャラバン)」の3つのフェーズがある。桜プロジェクトは、津波の遡上ラインにそって「山桜」を植えていくもので、「そこまで行けば津波から逃げられる」という安全の道標となっている。この他「再生のイメージ」を与える樹木のひとつに、震災遺構・旧門脇小学校の「被災樹木」(図4)がある。津波火災により焼けたイチヨウの根^{ひこばえ}本から葉が伸び、現在青葉が繁茂している。震災の爪痕がのこる教室や被災物に言葉を失った人々は、「生き続ける樹木」から希望を受け取るという。

福島県いわき市に板倉構法の仮設住宅(図5)を建てたのは建築家・安藤邦廣(図6、筑波大学名誉教授)である。板倉はスギの無垢材で構成される伝統的木造建築である。安藤は阪神大震災の反省から、次の災害を視野に入れ毎年使う板倉用のスギ板を乾燥しストックできる体制を整えていた。そのため、発災後すぐに板倉仮設住宅の設計等を被災地に提出できた。素材は間伐材を用いており、木を「使う」こと自体が森の整備、ひいては災害に強い森づくりにつながるという。間伐材を使うことで森を形成することは、彫刻のカービングの概念に近い。仮設住宅の木質化は地元の建設業等への経済効果に加え、解体後の資材がゴミにならず復興のインフラとなる。実際に任を終えた福島の仮設住宅解体が進む中、西日本豪雨災害(2018年)が起こったため、48戸の仮設住宅が岡山県総社市に移築されている(後に26戸を市営住宅として再々利用)。安藤は森と建築(芸術)の関係について、「山の姿を写している建築は美しいと思いますね。森の持続が人間の生命を守ってきたわけだから。建築家は森を見て建築する“森のデザイナー”であるべき。持続を可能にするには共有が必要。感情を共有するために、芸術や祭りがある」と語る。災害後、安藤は宮城県鳴子市の「鳴子こども園」(図7)の改修も手がけて



図5 安藤邦廣、里山建築研究所《板倉仮設住宅》いわき市、
2011年



図6 「安藤邦廣」2024年



図7 「鳴子こども園」

いる。木の間伐から子ども達に立ち会ってもらい、合意形成しながら10年かけて建設している。「成長過程において森の心地よさを体感させることが重要」と安藤は考えている。

(4) 九州北部豪雨災害(福岡県朝倉市):

寒水地区、あさくら観光協会、美奈宜神社

福岡県朝倉市は2017年、2018年、2023年とくり返し豪雨災害に見舞われている。被災者である満生直樹(寒水区長)、里川径一(あさくら観光協会)、内藤主税(図8)(美奈宜神社宮司、7月に急逝)に聞き取り調査を行った。2017年の九州北部豪雨災害の際、寒水は甚大な被害に見舞われつつ死者をださなかった。しかし再建した家屋が再び被災し、離村を決意する被災者も多いと満生は語る。そこで筆者は、災害で流れた祠(赤堂)を被災木によって寒



図8 「内藤主税」2024年



図9 「杓形餅づくり」美奈宜神社資料

水地区に再生する計画に協力している。里川は、河岸の復旧工事が進む中「川との関わりや、景観こそが宝物だったと気づいた。安全のためと言われたら、残してほしいと発言できなかった」という地域の声を聞いた。「平時にこそ、災害後の復旧工事において何を残すべきか、その優先順位を地域で話し合っておくべきだ」と里川は強調した。故・内藤主税が宮司を兼任した神社の中には、避難認定解除後も戻る住民がいない地区の社もあった。内藤は、黒川高木神社の宮座行事(国指定無形民俗文化財)の規模を縮小し続けた。そのひとつ「杓形餅づくり」(図9)は6本のカシの杵でつくが、杵の素材の杜が被災し採取が困難となっている。内藤に災害後の自然環境への感情の変化について質問したところ「逆に自然に対して畏敬の念を持ちました。自然の中で生かしていただいているのを改めて感じたというか。自分たちがどうできるような存在ではない」と答えている。信仰の根源には、自然への「感謝」と共に「畏怖」があることが窺える。

以上のフィールドワークを通して、森林を観察し体験すること、および木を使うことで「森をデザイン」する重要性が示された。また自然に関わる伝統文化や信仰における継続性や感情の共有が、コミュニティの再生に繋がることが明らかになった。

2. 森林の遺伝的系統調査と伝統知による価値創造

九州北部豪雨災害被災地の英彦山には、古代より修験道に基づく霊木信仰が存在する¹。この霊木信仰にかかる森林の文化的価値を科学と芸術を通して再考し、復興感を喚起する「物語」と価値創造に結びつける。

(1) 英彦山霊木群の遺伝子分析と被災霊木による作品制作

英彦山分水嶺の水源・英彦山は修験道の霊域である。木は神仏の依代とされ、江戸期まで伐採・持ち出しを禁ずる山中法度であった。英彦山のスギ霊木群は遺伝子の独自性をもつ可能性があり、

人為的に維持管理されていたことが九州大学農学部教授・渡辺敦史の科学的調査で示されている²。九州の在来スギは氷期に絶滅したとされ、その由来は謎とされてきたが、渡辺のゲノム解析により英彦山「鬼杉」(樹齢1200年)群は在来種の可能性が高いことがわかった。修験道の霊木信仰が、森林の遺伝子系統保全に貢献したと考えられる。英彦山は度重なる自然災害に加え、明治期の廃仏毀釈の破壊によって文化的価値を伝える仏教遺物が少ない。そこで、英彦山の霊木信仰に関わる被災木(鬼杉落枝、千本杉)による信仰対象《鬼杉不動》(2022年)、《鬼杉不動童子》(2024年、図10)を制作した。これらを英彦山神宮下津宮に奉納し、本作品素材の物語(遺伝子の希少性、修験道文化、災害からの再生)を伝える報告会を開催する(2025年3月)。



図10 知足美加子《鬼杉不動童子》2024年

(2) 災害被災木による楽器制作

英彦山千本杉の倒木を用いて楽器カリンバを制作した(図11)。来年度、台湾師範大学との合同ワークショップにおいて、九州北部豪雨災害被災木(スギ)でカリンバを制作し、曲を演奏する動画を被災地に届ける。



図11 《カリンバ(英彦山千本杉)》2025年

3. 朝倉三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり

朝倉市の三連水車1基と二連水車2基は、江戸時代の寛政元年(1789)から約230年間稼働する日本最古級の農業用木製水車である。豪雨災害発災後1ヶ月で稼働し、被災者の心を励まし「復興のシンボル」となった。水車群は5年毎に造り替えられるが、費用の約3割を受益者(農家)が担っており、その負担は重い(図12)。ウッドショック等による素材高騰に加え、マツ材線虫病蔓延によってアカマツ(中心軸)の調達が困難な状況が続いている。そこで、文化継承に必要な木材(アカマツ、カシ、シュロ等)を育成する「三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり」プロジェクトを朝倉市に提案した。協議の結果、小石原川ダム横のコア山の一部で試験的な森づくりを行うこととなった。現在、渡辺敦史研究室の協力のもと、英彦山、黒川地区の在来種実生苗、球果、挿木枝を採取し植栽準備を進めている。さらに三連水車の3

1 拙稿「英彦山修験道における自然信仰と森林文化再考—鬼杉落枝と千本杉による不動明王像制作—」日本山岳修験学会『山岳修験73』岩田書院2024年 pp. 19-35

2 渡辺敦史「霧島神宮スギ御神木と英彦山神宮に残るスギ古木群の由来からみたスギ植栽に対する思想の相違」『山岳修験74』岩田書院2024年 pp. 73-88

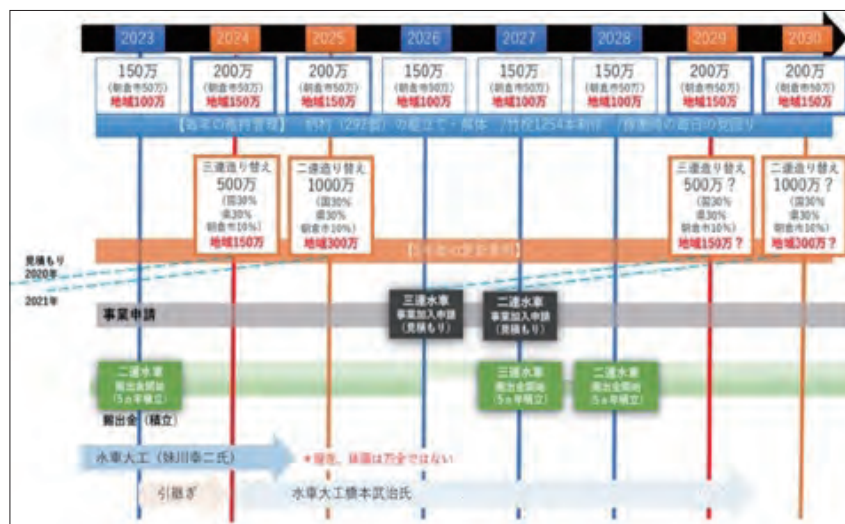


図12 「三連水車群の運営予算」筆者作成(協力:山田堰土地改良区)2023年

Dデータを取り(協力:井上朝雄研究室)1/40立体模型を制作した(図13)。また、山田堰から水車までの水の流れを可視化するCG動画を制作した(図14)。これらは水車大工の技術伝承、および自然エネルギーを利用する水車のSDGs的価値を再評価し、次世代の教育に役立てるものである。〈JSPS 科研費24K00031の助成〉



図13 「朝倉三連水車1/40模型」(協力:永江春紀)2024年

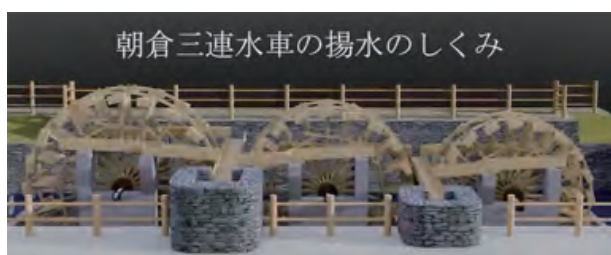


図14 「朝倉三連水車のしくみ」(協力:馬江陵)2024年

https://youtu.be/xvWYG5_6FQg?si=MFQo1lw4Dxb6eY6

*これらの詳細な活動報告は復興支援サイト「MILL」に記載(<https://mill-triple.com/posts/asakura2024>)



知足 美加子
(ともたり みかこ)
九州大学芸術工学研究院教授 博士(芸術学)／筑波大学大学院芸術研究科彫塑コース修了／青年海外協力隊美術隊員 コスタリカ共和国派遣／国画会彫刻部会員 日本山岳修験学会理事／自然とアートをテーマに復興支援活動等を行う

4. サンゴの生命の樹プロジェクト ーサンゴを育む間伐材の苗床の提案ー

気候変動の影響は海にも及んでいる。静岡県沼津市の内海湾では造礁性サンゴのエダミドリイシの群集が1990年代には約5,000㎡存在していた。現在、海水温異常やガンガゼ(ウニの一種)による食害等により総面積は2.3%ほどに減少し、2023年にはサンゴの白化現象が起こっている。そこで、サンゴを育成する苗床をつくる「サンゴの生命の樹」プロジェクトを提案している。沼津市特産のミカンの間伐材を用いて、サンゴを育成する樹形苗床とし、サンゴを育む森づくりを行う。海の豊かさのためには森林からの栄養分が必要であることから、この樹形苗床によって森林と海の繋がりを可視化する。海面下に美しいサンゴの森が広がることを市民にイメージさせることによって、環境保全への意識を高めネイチャーポジティブを目指す。安田仁奈(東京大学)、朝倉一哉(平沢マリンセンター)らの協力により、内海湾でミカンの木や竹、漆喰等へのサンゴの活着の予備実験を実施している(図15)。〈JSPS 科研費24K00079の助成〉

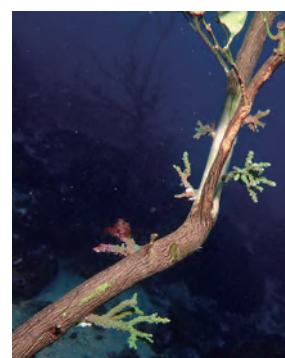


図15 「ミカンの木とサンゴの予備実験」(協力:朝倉一哉)2025年